

日本児童教育専門学校 児童教育科 教育課程編成委員会 開催記録

1.日時

平成30年2月23日（金）午後18時から午後19時00分まで

2.委員等氏名及び略歴

片岡 輝 東京家政大学名誉教授・社会福祉法人緑伸会理事長
宮澤 叙栄 社会福祉法人どろんこ会 越谷どろんこ保育園 園長
*岡田ひとみ委員代理

<陪席>

阿久津 摂 日本児童教育専門学校 副校長・教務部長・児童教育科 学科長
中西 和子 日本児童教育専門学校 総合こども学科 学科長
菊池 一英 日本児童教育専門学校 キャリアデザインセンター センター長
今泉 良一 日本児童教育専門学校 総合こども学科 専任教員
高井 均 日本児童教育専門学校 事務次長

◆議事要約◆

*本校は3学科とも保育系学科のため、当日は学校関係者評価委員会と教育課程編成委員会を同時に進行した。内容は教育課程編成委員会に該当部分の抜粋とする。

<初めに副校長阿久津より、平成30年2月5日に実施した、今回のテーマである平成29年度文部科学省委託事業『現場実践基礎力を有した保育士養成のための「保育現場での活動」のガイドライン作成』事業の成果報告会の共有があった。>

「保育現場での活動」のガイドライン作成』事業についての報告

<デュアル教育の定義・前提>

- ・デュアル教育とは：ドイツをモデルとした職業人育成を目的とした専門的で実践的なキャリア教育・職業教育である。
- ・デュアル（学校と保育所）で育成。学校は単位、保育所は報酬を与え、両者にとってよい育成システムを確立できないか？
→アルバイト契約をして、園で働くという形式はとれないか（法規的な難しさ有）
- ・実習と保育現場での活動の違い
実習→学校で学んだことが試される場
保育現場での活動→学校で学んでいることを、深く学んでいく。
- ・保育現場の方と、4つの現場実践基礎力を定義。特に「自ら考え、提案、行動ができる」は、現場から強い要望があった。

- ・現場実践基礎力に基づき、「到達目標レベル表」の運用を実施。
課題も多く、さらに現場活動チェックシステム「Step by Step」を開発。

<実証事業>

- ・1年目は現場と学校で作成したが、2年目は学生の視点も入れた。
- ・3つの企業「どろんこ会」「ベネッセスタイルケア」「チャイルドステージ」の協力をいただく。

(前期)

- ・午前中は保育所で現場に立ち、午後は授業に戻るスタイル→学びの刺激を得てくることを期待

課題：不安を持つ学生も出てきた。「何をすればいいの？」

現場の先生も実習との違いで困惑するケースもあり。

⇒育てる仕組みを再設計が必要。

(後期)

- ・事前に講義（オリエン）を行い、見学、活動を行う園を自分で選ぶ流れに変更。
- ・現場での行動の意味付けを、園長先生による解説で補足。
- ・自己診断と他社診断で振り返りが可能なツールを導入。
- ・即時的な評価ができるスタイル。

後期については学生も学びの実感を得られるようになった。

3年目に向けて、浜松や京都の専門学校とも話を進めているが、地域性もある。研究成果としては汎用性が求められるので、調整も必要。

以上の報告について各委員間で意見交換された。(以下抜粋)

- ・子どもの関係の持ち方と保護者との関係の持ち方の区別ができないケースがある。
→トラウマになって自信が持てない。
- ・近年は、保育に進む動機が弱く、シンプルなケースが多く（子どもが好き）、ミスマッチとなる。現場に行く前に、自分の適性やなぜ現場で体験したいのかをガイダンスしてあげることが必要（メンタル面）。
- ・現場に出る前に、保育士の資質を整えてあげる。
- ・実習でも、子どもとの接し方がわからない学生が増えている。学生に合った指導が必要。
→「Step by Step」で、小さいことを評価しながらというのはいいと思う。
- ・デュアルによって現場の保育士の成長にも繋がるのではないか？
- ・子どもとの接し方はよいが、文章が苦手な報告が書けない保育士もいる。万能な人は少ないので、それぞれに合った指導法が必要と現場ではよく感じている。

- ・現場の中堅も忙しすぎて、後輩の面倒を見られない。中堅の成長にも影響が出る。
- ・帰属意識が高まれば、後輩指導の意義も見えてくる。
- ・受け入れ側も学ぶ、利便性があれば、紙でなくタブレット導入も歓迎されるのでは。

以上、終了時間となり、散会となった。